

## 論文の内容の要旨

生圏システム学専攻  
平成 21 年度博士課程入学

氏 名 陳元君  
指導教員 石橋整司

論文題目 先住民居住地域に設置された自然保護区の管理手法に関する研究  
～中国海南省鸚哥嶺自然保護区を事例に～

生物多様性は生物圏の豊かさの指標であり人類生存の基盤の強さを表すもののひとつといえる。一方で、長年その豊かな自然の中で文化を発展させてきた人類は、自然のもつ生物多様性を利用する知恵をもっている。特に、熱帯地域は地球上でも最も生物多様性に富んだ地域といわれており、また、人類が古くから生活してきた場でもある。しかし、近年になって熱帯地域の森林でも大規模な伐採が急速に進むようになり、西部多様性に富んだ熱帯林は世界的にも希少となっている。こうした熱帯林消失の流れを阻止するために世界各地で自然保護区を設定し貴重な熱帯林を保護することの重要性が唱えられているが、それらの地域の多くは同時に数百年の昔から先住民が居住してきた地域であり、自然保護における先住民の位置づけは如何なるものかという議論を抜きに自然保護を語ることは片手落ちといわざるを得ない。

本研究では、こうした背景のもと、中国でも最も豊かな熱帯林が残る海南省の鸚哥嶺自然保護区を対象に、自然保護区における先住民の位置づけや意義を先住民サイドと自然保護管理者サイドの両面から検討し、先住民が居住する熱帯林地域に適応した自然保護区管理手法について考察した。

第 1 章では以上のような問題の背景と研究の目的について既往の文献のレビューを含めて論じた。

第 2 章では、第 1 節で中国海南省の大部分を占める海南島の自然と歴史について概観し、さらに先住民とくに本研究で取り上げる黎族についてまとめた。続いて第 2 節で中国にお

ける自然保護管理の体制と「護林員制度」についてまとめ、第3節で本研究の調査地と調査方法について詳述した。

第3章では、本研究の主要な研究対象である、「先住民」、「自然保護管理局」、「護林員」の3つの関係者毎に調査と分析を行った結果をまとめた。

まず第1節では、鸚哥嶺自然保護区周辺の山で古くから生活していた黎族がいまでも自然保護区内に住み続けている数少ない村である「道銀村」において調査を行った結果について分析を行った。調査を行った2012年時点で村に住んでいた11世帯すべてについて聞き取り調査を実施し、伝統的な生活や文化、自然保護区になってからの生活の変化、現在の生活についてまとめた。その結果、自然保護管理政策によって焼畑や狩猟、採集により支えられる伝統的生活に制約がかかっているものの、道銀村の住民の生活は建築や服装、農耕、狩猟、食生活等が1930年代に記録されたものと一致するところが多く残されていた。一方で社会の変容に合わせて新しい文化を取り入れている部分も少なくなく、特に子供の教育に関わる費用が格段に増えているために伝統的な生活であまり必要とされなかった現金収入がより必要となっており、安定した収入源の確立は先住民族である黎族にとっても不可欠となっていた。

次に第2節では、鸚哥嶺自然保護区管理機関のスタッフを対象に聞き取り調査を行い、自然保護区管理業務に対する考え方や実態を明らかにした。鸚哥嶺自然保護区管理機関は政府により、原始的な自然環境が残っている熱帯林の自然資源の保護を目的に設置された。他の自然保護区ではみられない規模の護林員を配置し、護林員による巡視を本格的に導入することにより盗伐等の違法的行為を減少させたことはスタッフ自身も評価していた。また、護林員制度の実施、村民連携プロジェクトや村民への宣伝教育活動の展開は、今までトップダウン型管理がほとんどだった海南省の自然保護区管理体制の中での新しい試みであり、意義があると考えられた。しかし、護林員の管理、育成、雇用等のさまざまな側面について「いまだ不十分」とみる意見も多く、「人手不足」、「人材不足」、「予算不足」などを克服することが大きな問題であった。一方、これまで行ってきた自然保護施策では先住民による資源利用の需要を大きく変えなかったことが明らかとなったが、「先住民の資源利用制限強化」という傾向が強まっており、「先住民に受け入れられる利用制限」のあり方を確立することが必要となっていた。

最後に第3節では、鸚哥嶺自然保護区の管理業務の要であることが明らかとなった「護林員」に対して聞き取り調査を行い、その実態を明らかにした。鸚哥嶺自然保護区では2007年に176人の先住民を護林員として採用しその後も新たな先住民を雇用しながら自然保護業務の最先端で活動させていた。海南島では自然保護区管理の人手不足は長く指摘されており、霸王嶺国家級自然保護区では面積3.0万haに対して護林員を含めたスタッフが64人、五指山国家級自然保護区では面積1.3万haに対して26人しか雇用していなかった。しかし鸚哥嶺自然保護区では公益林補助金制度をスタッフと護林員の雇用に利用して面積5万haに対して2012年時点で234人を雇用していた。特に護林員の雇用は他の自然保護

区より格段に多く、さらに先住民に特化して護林員を雇用していることも異例であった。元来自然保護区内の森林について豊富な知識を持つ先住民は盗伐や狩猟の取り締まりには最適の人材であり、実際に大きな成果を上げていた。護林員に採用された先住民はプライドと使命感を持って業務にあたっていたが、一方で、自らの仲間である先住民の活動を取り締まることにもなるため自然保護管理機関と住民の板挟みになることも多く苦痛を感じているものも少なくなかった。業務内容が多様で体力的に厳しいと感じている護林員も多く待遇面での不満につながっていた。こうした点を早急に是正し、先住民の護林員による自然保護管理活動をより円滑に進めていくための自然保護区管理機関によるバックアップが必要不可欠と考えられた。

第4章では、第3章までの検討結果を踏まえて、先住民居住地域に設置された自然保護区の管理手法に関する総合考察を行った。

一般的に自然保護を脅かすのは①外部の人間あるいは組織による大規模な土地開発、②地域住民による生活のための資源利用、の2つの場合が考えられる。海南島でも森林伐採や土地開発の波が現在の自然保護区の近くに迫ってきていたが自然保護区の設置によりその勢いを止めることができたといわれている。鸚哥嶺自然保護区でも2004年に設置されてから管轄地域に大規模な森林伐採や火災は一切に起こっていなかったことは既往研究の結果と一致した。したがって、海南島での自然保護区管理は主に地域住民の資源利用をどのように制限するかが中心となっているが、特に鸚哥嶺自然保護区では所轄地域内部に居住する先住民による資源利用管理は大きな課題である。

鸚哥嶺自然保護区は格段に大勢の先住民を護林員として雇用したが、資源利用をめぐる自然保護区管理機関と先住民と紛争は長く続く傾向にある。一方、大規模な先住民の護林員雇用による連携強化と自然保護の重要性に関する教育活動の増強に力を入れ先住民の不満解消を試みている。いわば資源利用を巡り鸚哥嶺自然保護区管理機関と先住民との紛争の両面に護林員としての先住民の採用が影響している状態にある。自然保護区の第一の使命は自然資源の保護であることから鸚哥嶺自然保護区での自然保護事業は成功していると評価ができる。しかし、資金不足と人材不足は大きな問題として残っており、更に深く遡ると自然保護区管理の需要と鸚哥嶺自然保護区を支えている公益林制度との不一致が見える。公益林の一種としての自然保護区はより高いレベルの自然保護目標が設置されており、公益林補助金だけでは多様な自然保護施策と専用資金としての利用範囲を越えた管理機関の運営を支えることはできない。また護林員として有意に先住民の有力者を招いたこととは逆に自然保護区管理機関のスタッフは漢民族の外来者で占められており、鸚哥嶺自然保護区での自然保護施策が大きく護林員頼りとなりスタッフは現場を離れている傾向が見えた。自然保護区管理機関の最前線にいる護林員と先住民との紛争が激しく、長く続くようになると護林員が先住民に偏り違法行為を庇うようにある可能性も十分考えられる。現実に先住民からの圧力に堪えられないという理由で辞職する護林員も少なくない。現行の自然保護区管理を持続させるためには、まず「先住民」、「自然保護管理機関」、「護林員」の

三者の位置づけを明確にする必要がある。

道銀村の事例では 2012 年時点では村民が自然保護局に協力的な態度を示していたが、これにはゴム価格の高騰と自然保護区管理機関がエコツアーなど連携プロジェクトを盛んに推進したことが背景にあった。しかし 2012 年以降はゴムの市場価格が大幅に落ちゴム採集による現金収入が減少しているため、違法であってもかつて主な現金収入源であった森林植物採集を復活させる可能性は十分に考えられる。そこで自然保護目標を遵守しながら先住民に安定した収入を実現できる連携プロジェクトの開発・推進が急務である。

鸚哥嶺自然保護区で持続的自然保護区管理を続けていくためには、村民に安定かつ自然保護目標に対応した現金収入源を提供すること、管理機関の判断で自由に利用できる新たな資金制度の確立、そして人材の確保が重要である。まずは鸚哥嶺自然保護区管理機関の運営と施業に資金を確保し、そのことによりスタッフの養成や長期管理計画の実現可能性を高め、また、護林員へのサポート体制の充実、エコツアーなどの先住民の伝統と知識を有効に活用しつつ自然保護管理の目的に反しない現金収入源を確立することが、先住民と自然保護区管理機関とが両立する管理手法の開発につながっていくと考えられる。